

護衛艦建造における技術的変遷

○佐々木 司（防衛省技術研究本部技術開発官（船舶担当）付）

特徴

海上自衛隊創設以来わが国で建造された護衛艦について、技術的な観点からその変遷について解説する。

概要

海上自衛隊では、国産第1号の護衛艦「はるかぜ」から始まり、最新型の22DDH型護衛艦に至るまで27種類、109隻の護衛艦を建造してきた。

この間、第二次世界大戦当時の技術からスタートした護衛艦は、ミサイル搭載護衛艦、ヘリコプター搭載護衛艦、コンピューターを駆使してシステム化された護衛艦など、我が国を取り巻く国際情勢の変化や各種技術の進歩等に伴う海上自衛隊の要求の変化に的確に対応すべく船舶設計を具現化してきた。近年は汎用型護衛艦のみならず、多様な任務に対応するため、「ひゅうが」型や22DDH型のように従来の護衛艦とは異なる形の護衛艦も計画されるようになった。

技術研究本部で艦船の設計を行うようになって50年余り、その間、艦船建造に関する各種技術の進歩は、艦船の外観はもとより、その運用方法も大きく変化させた。

当日は、技術研究本部が設計を担当した海上自衛隊の歴代護衛艦が時代の変化に応じてどのように技術的な変遷を遂げたのか、具体的な事例を基に紹介する。



図1 護衛艦あきづき
(S35. 2. 13 就役、H5. 12. 7 除籍)



図2 護衛艦あきづき
(H24. 3. 14 就役)